

## 生徒の意欲を引き出すキャリア教育 社会へ出て行く若者たちに学校ができること

リクルートワークス研究所  
辰巳 哲子

「キャリア教育」という言葉について学校現場をはじめ、産業界でもよく耳にするようになった。キャリア教育は文部科学省の定義によると、「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」とある。端的には「児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てる教育」である。キャリアという、日本語には直訳しづらい概念だという理由もあるのだが、キャリア教育を浸透していくにはまだ時間がかかりそうである。本稿では、県の教育委員会との共同研究や学校現場での授業実践の経験をもとにキャリア教育の考え方や進め方についてお伝えしたい。

### ■一章 「キャリア教育」が話題になる背景

フリーターやニートなどが社会的に問題視されはじめたのを背景に、2002年の経済財政諮問会議において「人間力戦略」が打ち出された。これを受け、内閣府を中心とした「人間力戦略研究会」が2003年からスタートした。1999年の中教審答申においても「学校教育と職業生活の接続の改善のための具体的方策」の中でキャリア教育について触れられていたが、学校現場での活動につながるにはまだ時間を要するものであった。人間力戦略研究会がいう人間力とは「社会を構成し、運営するとともに自立した一人の人間として力強く生きていくための総合的な力」と定

義され、2003年には文部科学省、厚生労働省、経済産業省と内閣府の3省庁連携による「若者自立挑戦プラン」が出された。これは3年間の取り組みで教育・雇用・産業政策の連携を強化することによって若年者の働く意欲を喚起することによる、若年者の職業的自立の促進、若年失業者の減少を目指したものである。文部科学省はこのプランを核としながら『キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書』を発表し、キャリア教育推進プランとして、16年度から3ヵ年の計画で全国45地域にキャリア教育推進指定地域を設けた。

### ■二章 「キャリア教育」についての疑問

#### ● 「キャリア」の意味がわからない、 「キャリア教育」の意味がわからない

キャリア教育に取り組み始めたばかりの学校現場での誤解は、大きく三つに分類される。

- ① 高尚なもの、レベルの高い生徒が学習する内容である
- ② 高等学校卒業後すぐに働き始める生徒を対象としたものである
- ③ 職場体験やインターンシップのことを指す言葉である

①と②は対象に対する誤解であり、③は手法に対する誤解である。

文部科学省ではキャリアという言葉で「個々人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖及びその過程における自己と

働くこととの関係づけや価値づけの累積」と定義している。前述した人間力戦略会議でも議論されたことであるが、人は社会に出たときに、職業生活側面・市民生活側面・文化生活側面といったようないくつかの側面を持つ。キャリア教育の中では、特に、労働生活側面について必要な力を身につけられる教育を実践していこうとしている。社会に出て行くどの学生にとっても必要な教育なのである。また、児童生徒が学校で勉強している内容を彼らの将来や日常の活動と結びつけることもキャリア教育の目的の一つである。学習の目的を明らかにし、学習意欲をあげていくための取り組みなのである。この目的を果たそうとすると、インターンシップなど、生徒の日常から切り離された一過性のイベントだけでは不十分で、学校内の活動と上手く連動を図っていく必要がある。

### ●これまでの進路指導とどう違うのか？

個人のキャリアは小学校—中学校—高校と連続したものであるため、キャリア教育も連続した個人のキャリアを支援するものでなくてはならない。キャリア教育では発達段階の考え方を重視している。小学校からすべて同じ枠組み(人間関係形成能力・情報活用能力・将来設計能力・意思決定能力)を使い、ひとりひとりの発達段階に応じたキャリア教育をこの枠組みの中で行うことを重視している。

このように同じ枠組みを使って、発達段階に沿った教育を実践しようとした場合、高校は中学校に対して指導内容を公開し、中学校における指導について具体的な要望を示す。また、中学校で行われている指導の内容を把握する必要がある。

これが次にも述べる、学校間をつなぐということになる。

### ●学校間をつなぐ方法は？

よく聞かれる質問の一つが、「どうやって

小学校と中学校、高校をつないでいけばよいのでしょうか？」という質問である。

キャリア教育を一つの学校だけで、また、そこで働く教員だけで実践していくことはできない。学校間をつなぐ第一歩はお互いの活動内容を知ることである。高校からは、中学校に対し、中学校でどんな進路指導が行われているのか、職場体験授業ではどのような学習をしているのかといった簡単な質問をするところから始めればよい。ある学校では中学1年生に、自分たちが一年間のキャリア教育で何を学習したかを小学6年生にプレゼンテーションさせていた。小学生は4月からスタートするであろう、新生活への不安を抱えている子もいるため、一学年上の先輩たちの話を聴いて安心したようだ。また同席していた先生は自分たちが関わってきた子供たちが一年で大きく成長しているのを実感すると同時に、中学校の活動を知ることによって、小学校のうちにやっておかなければならないことがまだある、という気づきをもつことができる。これは、中学校と高校の間でも応用することができる。

### ●キャリア教育に関わる人たちを巻き込む方法は？

教員、地域の社会人、保護者の方などキャリア教育を行うには、関わる関係者は多く、それぞれの関係者は異なった役割を持っている。

・保護者の役割：保護者には自分の経験を伝える役割、こどもたちの気づきをより深いものにしていくための対話を行う役割がある。この対話を促すきっかけを作ることは既存の学校教育の枠組みの中でできることである。ある先生は、数学の時間が終了した後、生徒たちに宿題を出した。「家に帰って、一次関数の授業で習ったことを保護者の方に伝えてください。そして一次関数を仕事の中でどの

ように使っているかということを知りたい」といって来て下さい。この先生はこのあとの授業の中で生徒から集まった宿題に書かれた情報を活用されたそうである。直接的な関係はなくても現在学校で学習していることが将来にどうつながるのかという情報は学習意欲の向上につながる。文脈の中で学習した事柄はその後にも記憶に残りやすい。またこうした情報を教師一人で集めるには限界がある。保護者の持つ情報をぜひとも活用したいものである。キャリア教育の授業計画を立てた後で、「授業の展開案」として保護者が参加できるような展開をあわせて考えるということもキャリア教育を推進する時の一つの方法である。

・企業関係者の役割：インターンシップが盛んになり、学校現場では以前にも増して企業関係者との接点が増えている。職場体験授業やインターンシップに参加した企業の方に話を聞くと、「自分たちが協力したことが喜ばれたのはよくわかるが、本当に役に立ったのかどうかがよくわからない」という声がよく挙がっている。企業は「どんな目的を持って生徒が職場に来たのか」を知りたいと思っている。社会のニーズを知り、そのニーズに対してなんらかの形（商品やサービス）で応えることによって、対価を得るといのが企業活動である。学校は自分たちのニーズ（活動の目的や期待する事柄）を伝えているだろうか。活動の目的、終了時の生徒の状態について教育のねらいを明確に企業側にも伝えておくことが重要だ。ある県の教育委員会の方からは、「今までどんなことでもいいから生徒が気づいたことを大事にしたいと思っていました。でも指導の目的を明確にして、学習目的を果たせる活動になっているかどうかというのは校外の体験でも大事なことです」と言われた。もちろん生徒ひとりひとりの個別の気づきは大切である。同じ体験をしていて

も気づく事柄は異なるだろう。だが、それは教育のねらいを果たした上でのことである。「企業の方も忙しいから…」「無理を言って受け入れてもらったインターンシップだから」という理由で、子供のことを考えると「本来してはいけない遠慮」をしていないだろうか。ねらいがはっきりすると企業も動きやすい。また、自分たちの取り組みを振り返ることができるのである。こういった振り返りが翌年の受け入れ継続にもつながっていくのである。

### ■第三章 キャリア教育の仕組みをつくる ～地域でキャリア教育を進めていくためのステップ

①キャリア教育を進めていくためのメンバーを決める

メンバーには小中高の先生だけでなく、地域の企業、経済団体の人が加わる、保護者の代表の方にも加わってもらうことが大切である。初期のプロジェクト立ち上げの段階から当事者として関わってもらうことは、この後の活動を進めるにあたって重要である。いきなり小学校や中学校の先生に声をかけることに抵抗がある場合は、意見聴取の場をもつことからスタートしてもよい。

②参加者が感じている課題を共有する

地域ごとに課題があるはずである。クラス替えて新しい人に触れる機会を持つことがしづらい小人数校のため初対面の相手に自分の意見をはっきり伝えることができない子が多い、繁華街の近くにあるため、ロールモデルとして触れる大人に問題がありフリーターを目指す子供が多いなど、地域の課題はさまざまだ。企業の視点、保護者の視点からもそれぞれの意見が出てくることだと思う。立場の違う人たちとの課題の共有には時間がかかるが、ここで課題を共有しておくとその後の解決策（具体的な授業計画の作成など）が目的に沿ったものになっているかどうかといった

検証が容易になる。

③目標を決める

どれぐらいの期間で何を実現するのか、発達段階ごと（学年ごと）に目標を決めることが大切である。後で結果を評価することができものにしておくことも目標を決める際の

必要な視点のうちの一つである。

④既存の活動を整理してみる

キャリア教育はまったく新しい活動ばかりを盛り込んだ教育ではない。キャリア教育の四つの力（図表①参照）に結びつくような既存の活動をまず見直して見る必要がある。

図1 職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み

領域	領域説明	能力	能力説明
人間関係形成能力	他者の個性を尊重し、自己の個性を発揮しながら、様々な人々とコミュニケーションを図り、協力・共同してものごとに取り組む。	自他の理解能力	自己理解を深め、他者の多様な個性を理解し、互いに認め合うことを大切にして行動していく能力
		コミュニケーション能力	多様な集団・組織の中で、コミュニケーションや豊かな人間関係を築きながら、自己の成長を果たしていく能力
情報活用能力	学ぶこと・働くことの意義や役割及びその多様性を理解し、幅広く情報を活用して、自己の進路や生き方の選択に生かす。	情報収集・探索能力	進路や職業等に関する様々な情報を収集・探索するとともに、必要な情報を選択・活用し、自己の進路や生き方を考えていく能力
		職業理解能力	様々な体験等を通して、学校で学ぶことと社会・職業生活との関連や、今しなければならぬことなどを理解していく能力
将来設計能力	夢や希望を持って将来の生き方や生活を考え、社会の現実を踏まえながら、前向きに自己の将来を設計する。	役割把握・認識能力	生活・仕事上の多様な役割や意義及びその関連等を理解し、自己の果たすべき役割等についての認識を深めていく能力
		計画実行能力	目標とすべき将来の生き方や進路を考え、それを実現するための進路計画を立て、実際の選択行動等で実行していく能力
意思決定能力	自らの意志と責任でよりよい選択・決定を行うとともに、その過程での課題や葛藤に積極的に取り組み克服する。	選択能力	様々な選択肢について比較検討したり、葛藤を克服したりして、主体的に判断し、自らにふさわしい選択・決定を行っていく能力
		課題解決能力	意志決定に伴う責任を受け入れ、選択結果に適応するとともに、希望する進路の実現に向け、自ら課題を設定してその解決に取り組む能力

国立教育政策研究所生徒指導研究センター発行「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について」より抜粋

図2 中学校・高等学校学習指導要領における主なキャリア教育関連事項

学校教育		内 容	人間関係形成能力	情報活用能力	将来設計能力	意思決定能力
各教科	・国語科における他者の考えの尊重や自己表現に関する学習		●			
	・社会科の地理・歴史の分野において資料の選択・活用を行い、事象を多面的・多角的に考察する活動			●		
	・社会科の公民的分野において職業の意義と役割や余暇生活の多様化について考えること			●		
	・技術・家庭において仕事の楽しさや完成の喜びを体得すること			●		
	・理科において問題を見出し、規則性を発見したり、課題を解決したりする方法を習得する過程					●
	・高等学校における「産業社会と人間」などの学校設定教科・科目での学習			●	●	
特別活動	学級（ホームルーム）活動	・学級や学校における生活上の諸問題の解決、学級内の組織づくりや仕事の分担処理などの活動	●		●	●
		・個人及び社会の一員としての（在り方）生き方に関すること	●		●	
		・青年期の不安や悩み（悩みや課題）とその解決、自己及び他者の個性の理解と尊重、社会の一員としての自覚と責任（社会生活における役割の自覚と自己責任）、男女相互の理解と協力、望ましい人間関係の確立（コミュニケーション能力の育成と人間関係の確立）、ボランティア活動の意義の理解、（国際理解と国際交流）など	●	●		
		・学業生活の充実及び将来の生き方と進路の適切な選択（決定）に関すること			●	●
		・学ぶことの意義の理解、自主的（主体的）な学習態度の形成（確立）、選択教科等（教科・科目）の適切な選択、進路適性の吟味（理解）と進路情報の活用、望ましい職業観・勤労観の形成（確立）、主体的な進路の選択（決定）と将来設計など		●	●	●
	生徒会活動	・学校生活の充実・改善向上を図る活動やボランティア活動など		●		●
学校行事	・勤労生産・奉仕の行事における職業や進路にかかわる啓発的な（職業観の形成や進路の選択決定に資する）体験やボランティア活動など		●			
道 徳	・自分の役割を自覚し、協力して主体的に責任を果たすこと		●		●	
	・勤労の尊さや意義を理解するとともに、奉仕の精神をもって、公共の福祉と社会の発展に努めること			●		
総合的な学習の時間	・学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探求活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の（在り方）生き方を考えること				●	●
	・（生徒が興味・関心、進路等に応じて設定した課題について知識や技能の深化、総合化を図る学習）		●		●	
	・ボランティア活動などの社会体験、見学や調査、発表や討論、ものづくりや生産活動などの体験的な学習			●		
その他	・集団生活への適応と選択教科（教科・科目）や進路の選択にかかるガイダンスの機能の充実			●		●
	・高等学校普通科、専門学科におけるコースや類型及び選択科目の設置、総合学科における系列の提示と多様な選択科目の設置など					●

図表②では、学習指導要領とキャリア教育関連学習の関係を示している。総合的な学習の時間、進路指導の時間のみならず、社会科や国語といった教科の中にもキャリア教育につながる活動が存在する。すべての学校活動を整理することが必要である。

#### ⑤足りない活動をあきらかにする

既存の活動についての整理ができれば、3つの視点で検証を行う。(1) 8つの能力それぞれに応じた活動が存在しているかどうか、バランスはどうか、(2) 学校外の活動を一過性のイベントで終わらせない、事前事後の学内授業が行われているかどうか、(3) 集団活動だけでなく個人に対応した活動が存在しているかどうか。(3)は前述したように発達段階は個別に異なっているため、集団の活動だけではカバーできない取り組みを検討するのに必要な視点である。

#### ⑥足りない活動に必要な資源を調達する

足りない活動を補うためには地域の協力者が必要である。また、教員が新たに身につけなければならない知識や情報を明らかにするため、これらを得る方法についても検討を行う。キャリア教育を実施したことのない教員が多い場合、キャリア教育とは何かといったことを学校内で共有する場が必要である。座学の研修時間を設けるだけでなく、実践している先生の授業を公開し、他の先生が見学できる機会を設けるなどの取り組みも重要だ。

#### ⑦評価の仕組みを作る

評価には2種類ある。最初に立てたキャリ

ア教育の目標を果たすことができたかどうかという評価(授業に対する評価)と、生徒個人の発達が促されたかどうかという評価である。もちろん両者は関連しているものであるが、最初に評価の指標を作るときにはあえて分けておいたほうがよい。教育の結果は数値化できるものではないが、子供たちにとっていい結果を生んだのかどうかという視点は必要である。学校の外の方に意見を聞くのもよいし、授業が終了した後の生徒たちの意見によってプログラムの評価を行い、次への改善につなげていくといった手法もある。

ある地域を訪問した際、講演終了後に懇親会が開催された。この懇親会に参加された先生の一人から声をかけられた。「小学校と中学校と高校の教員が一つの飲み会に参加するなんて、初めてのことです。同じ子供に関わる教師として今まで交流がなかったこと自体不思議なことなのでしょうね」。

地域の様々な大人たちが、キャリア教育を通じてどのように子供たちの教育に関わっていくか、個々人の取り組みだけでは足りない知恵を相互に補完していく時期に来ている。キャリア教育に関わる大人たちに必要な視点は、子供たちに知識を提供することだけでなく、生徒たちが良質な気づきを得られる機会を作ることである。

日本のキャリア教育はまだ始まったばかりである。推進指定を受けた地域の先生方は皆熱心に手法を模索されている。今後の各地域の取り組みに期待したい。